

バリ・ヒンズー文化の供花に関する調査報告

新妻昭夫(人間環境学科)

本論は、2006年7月中旬に行なったバリ島での「チャナン(canang)」についての調査の報告である。「チャナン」とは、バリ・ヒンズー文化の供花のことであり、園芸文化の研究対象として特殊なテーマといわないまでも、一見したところでは、一般性のあるテーマとは思わない人が大半であろう¹。そこで、筆者がなぜ「チャナン」に注目したかについて、はじめに少し詳しく述べておくことにする。

はじめに——第三の花弁文化と「チャナン」

筆者のここ数年の主眼は、人間と植物の関係のあり方を生態学の視点から広く一瞥し、そのなかに「ガーデニング(園芸)文化」を位置づけようとするところにある。そのような視点で見たとき、庭や庭園に植えられる色とりどりの花々の位置づけが、もっとも困難な問題として浮上してくる。花は、生物学的にいえば植物の外部生殖器官であり、生態学ないし進化生物学的に説明すれば、私たちが魅了する花の色や香りは受粉媒介昆虫を誘引するための仕掛けである。花は人間のために咲いているのではなく、人間と花のあいだに特別な関係はない。まして日本の「生け花」や欧米の「フラワーアレンジメント」など花卉装飾は、生態学的な議論にまったくそぐわないように思われる。

このような問題を考えるとき、筆者が拠り所としている仮説がふたつある。ひとつは進化生物学者エドワード・O・ウィルソンの「バイオフィリア仮説」²だが、緑陰樹や果樹あるいは薬草はさておき、人はなぜ花を身近に置き

たがるかについては、ほとんどヒントをあたえてくれない³。もうひとつの
拠り所が、中尾佐助の「第三の花卉文化圏仮説」⁴である。名著『花と木の文
化史』(岩波新書)で提唱された二大花卉(庭)文化圏——西アジアから地中
海沿岸で起源し、後に西欧に広く伝播した花卉(庭)文化と、中国ではじまり
朝鮮半島や日本、あるいはベトナムなど周辺地域に伝播した花卉(庭)文化
——に加え、第三の花卉(庭)文化として、オーストロネシア(大雑把にいえ
ば島嶼東南アジアからオセアニア)で独自の発展をとげた植物の利用様式
が付け加えられた。

中尾はこの第三の花卉(庭)文化の特徴として、いくつかの点を指摘し議
論している。花木が多いこと、薬草にも野菜にも利用され鑑賞にもたえる
といった多用途の植物が多いこと、芳香の強い植物が多いこと、あるいは第
一と第二の花卉(庭)文化が支配階級の権力誇示として発展したのに対し
て、第三の花卉(庭)文化が農民の菜園からはじまっただろうという点など
である。

しかし、第三の花卉(庭)文化の特徴のうち、本論にとってもっとも注目
すべき点は、花を「切花」にせず、「花首」⁵だけをつないで花輪を作ったり、
あるいは髪飾りに使ったりすることである。ハワイの観光名物となっている
「レイ」(花輪)⁶はよく知られているが、インドのヒンズー文化の供花の
花輪(「マーライ(Malai)」と呼ばれる⁷)も花首だけが使われている。花輪に
作らずに、花首をそのまま器に盛ったのが、バリ・ヒンズー文化の「チャナン
(canang)」と呼ばれる供花だといえればいいだろう。

他の文化圏での花の利用について知れば、私たちがなぜ庭の花を愛で、食
卓を花で飾りたがるのか、そして求愛や葬儀に花が欠かせないのはなぜか
を理解する助けになるだろう。西洋の花文化とも、また日本や東洋の花文
化とも異なる花の利用が、中尾の第三の花卉(園芸)文化圏で見られ、そのな
かでバリ島は交通の便など調査上の利便性がとくに高い。

そこで、バリ・ヒンズー文化の供花「チャナン」を切り口にして、中尾の「第
三の花卉(庭)文化」の実態の予備調査を計画し、2005年12月および2006年
2月にバリ島で、それぞれごく短期間の調査を行った⁸。場所はクタ(Kuta)

およびウブド (Ubud) という観光地である。その結果、バリ・ヒンズー文化では花を盛った供物「チャナン」が大量に、しかも日常的に使われていることを確認できた。また2006年2月には、シンガポールのインド人街 (Little India) で、比較のためインド・ヒンズー文化の供物の花輪をごく短時間だけ観察し、さらに同年9月にシンガポールの同地区とタイの仏教寺院などで短期的な補足調査を行った。

この予備調査で注目されたのは、「チャナン」が大量に売買され(女性たちが市場などで、数十個単位で買っていく)、大量に消費されていることである(数日でゴミ箱行きとなる)。また花の品質がそろっていて、しかも質が比較的高いことも注目された。これらのことから、バリ島では大量の花がチャナンとして消費されているだけでなく、大量の花が流通し、また大量の花がどこかで生産(栽培)されていると予想された。この予想にもとづいて、今回の調査は計画された。

今回の調査の概略——市場での売買の調査と栽培地の調査

調査の場所と方法は、大きくふたつに大別される。(1)デンパサールのバドゥン市場 (Pasar Badung) での観察と聞き取り調査、(2)市場などで得られた情報にもとづく栽培地の調査である。

(1)バドゥン市場での観察と聞き取り調査は、2006年7月12日、13日、20日の午前中と、14日の夕方に行なった。バドゥン市場はデンパサール市内で最大規模の市場であり、デンパサール市はバリ島の行政および経済の中心地なので、この市場はこの島の流通の中心に位置すると見なしていいだろう。補足的な観察と聞き取りは、次に述べる栽培地の調査の途次に、ブドゥグル村 (Desa Budugul) のチャンディクニン市場 (Pasar Candikuning) で行なった。

(2)栽培地の調査は、車をチャーターして、7月15日と19日にそれぞれ一日をかけて行なった。15日は市場などで得られた情報にもとづき、バリ島の中央山地の中ほどにあるブドゥグル村 (標高1200メートル前後) からゴブレグ村 (Desa Gobleg) にかけて広がるアジサイの栽培地を目的とし、

その途中でハウセンカの栽培畑も調査した。19日は、チャンパカとイランイランの栽培地を捜すべく、運転手が収集した情報にもとづき、サンゲ村 (Desa Sangeh) の東の地域において寺院の境内や村の並木道として植えられているものなどを調査し、平行してアジサイとハウセンカの補足的な調査も行なった。さらに7月18日に島の東のチャンディダサ村 (Desa Candidasa) からデンパサールに移動する途中でも、ハウセンカの栽培について補足的な調査を行なった。

調査結果の1——市場での観察と聞き取り調査

まずチャナン用に市場で売られている花の名前について聞き取り調査を行なった。Warren and Tettoni (2004) に掲載されている植物のインドネシア語名も参考にした。その結果が表1と2で、チャナンに使われていないが関係のあるものも含まれている。

チャナンおよびその材料の花は、市場の建物のなかと外周で売られ、売り子はいずれも「イブ (ibu)」すなわち結婚した成人女性である⁹。売り方の様子は、建物のなかと外周とで無視しえないちがいがあ

る。市場の建物は三階建てで、その一階の野菜売り場の近くに、チャナンを作って売っている店がいくつも出ている。目立つような店構えの構造物はないが、売り場はそれぞれ固定したブースとなっている。必ずしも店が並んではないが、ある程度の一画をなしている。チャナンだけでなく、宗教儀式に使うさまざまな道具類や、チャナンにふりかける香油、チャナンに添える線香も並べられている。売られているチャナンは、花の種類や新鮮さ、盛り方から、やや高級品のように見えた。

市場の建物の周囲、敷地内の駐車スペース、そして敷地を囲う塀の外側に、郊外から運び込んだチャナンの完成品および材料の花を売っているイブがたくさん座っている。市場の敷地内は野菜売りの方が圧倒的に多く、混じるようにしてチャナン売りがいる。駐車スペースの一画と塀の外側には材料の花売りがある程度まとまっていて、チャナン売りはほとんどいない。

表1:花の種類と名前(チャナンに一般的に使われる花)

	インドネシア語名	種名・科名	備考
①	Kembang seribu	アジサイ (<i>Hydrange macrophylla</i>) アジサイ科 (Hydrangeaceae)	低木・無香・日本?
②	Pacar (Balsem)	ハウセンカ (<i>Impatiens balsamina</i>) ツリフネソウ科 (Balsaminaceae)	1年草・無香・インド 赤、ピンク、薄赤紫
③	Miter	マリゴールド (<i>Tagetes sp.</i>) キク科 (Compositaceae)	1年草・無香・ メキシコ
④	Cempaka (Kantil)	チャンパカ (<i>Michelia champaca</i>) モクレン科 (Magnoliaceae)	中木・強香・ インド~中国南部 白・淡黄色・淡オレンジ色
⑤	Sandat (Kenanga)	イランイラン (<i>Cananga odorata</i>) バンレイシ科 (Annonaceae)	中木・強香・ インド~フィジー 淡緑色・淡黄色
⑥	Kemboja (Frangipani, Jepun, Cempaka)	プルメリア (<i>Plumeria sp.</i>) キョウチクトウ科 (Apocynaceae)	中木・強香・熱帯アメリ カ・淡黄色
⑦	Bunga Tunjung (Lotasi, Seroja, Bunga Padam, Teratai, Sirih)	スイレン (<i>Nymphaea sp.</i>) スイレン科 (Nymphaeaceae)	多年草・強香・アフリ カ~アジアの熱帯
⑧	Pandan Harum*	パンダナス (<i>Pandan asamaryllifolius</i>) タコノキ科 (Pandanaceae)	多年草・微香・東南ア ジア葉の細切れ

*野生種はタコノキ (*Pandanus tectorius*)。Harumは芳香 (fragrant, fragrance) の意味なので、芳香のある栽培種 (*P. amaryllifolius*) と判断した。芳香種は草丈が比較的 low、葉縁に棘はない。Chan and Tettoni (2003) によれば、料理の香り付けに使うほか、細かな粉にしてチャナンに使い、またゴキブリ除けにもなるという。しかし、細かな粉は細切れの間違いであろう。またインドネシア名を pandan serani (英訳すると Eurasian pandanas) として語源は不明と述べているが、おそらく pandan serai の間違いだろう。minyak serai=citronella=シトロネラ油(香水、除虫用)であり、pandan serai=シトロネラの香りのするパンダナスとなる。

表2:花の種類と名前(その他)

⑨	Ratna	センニチコウ (<i>Gomphrena glogasa</i>) ヒユ科(Amaranthaceae)	1年草・無香・インド チャナンには使わず、 他の飾り物に使う。
⑩	Kembang sepatu (Bunga raya, Bebaru, etc)	ハイビスカス(<i>Hibiscus sp.</i>) アオイ科(Malvaceae)	低木・無香・中国南部 ～東インド諸島 各家庭でチャナンに 加える。
⑪	Nusa Indah (Musenda)	ヒゴロモコンロンカ (<i>Mussaenda sp.</i>) アカネ科(Rubiaceae)	中木・無香・熱帯アフ リカ 各家庭の庭木を使う。 ただし袋詰めを1個だ け市場で見かけた。
⑫	Kembang kertas (Buganvil, Bunga kertas)	ブーゲンビリア (<i>Bougainvillea sp.</i>) オシロイバナ科(Nyctaginaceae)	木本蔓・無香・ブラジ ル。市場でたまに売 られているが、一般 的ではない。
⑬	Melati(Jempiring)	ジャスミン(<i>Jasminum sp.</i>) モクセイ科(Oleaceae)	木本蔓・強香・熱帯ア ジア。重要な芳香花 だが、チャナンに盛ら れていないし、市場 で見たこともない。
⑭	Celeng	チョウマメ(<i>Clitoria ternatea</i>) マメ科(Leguminosae) 英名はBlue Pea	木本ツル植物・無香・ 熱帯アジア。市場の チャナン売りで、2例 だけ。染料。
⑮	Taman Kuning	△△(・・・sp.)・・・科(…………)	?木・?香・・・同上の2 例だけ。地味な薄黄。
⑯	Sdap malam	ゲツカコウ(<i>Polianthes tuberosa</i>) リュウゼツラン科(Agavaceae)	多年草・強香・メキシ コ。切花用
⑰	Janur(Busun: Bahasa Bali)	ココヤシ(<i>Cocos nucifera</i>) ヤシ科(Palmae)	高木・西太平洋。若葉 をチャナンの器など の材料に多用する。

さらに塀の外側の花売り集団の道路側のオートバイ駐輪スペースには、チャナンの器を売るイブたちと、その材料であるココヤシの若葉を売るイブたちが、15人から20人ほどのルーズな集団をなして商いをしている。道路にはみだすように立ち、また座らずに立っているだけで、客に声をかけることはないので、おそらくなんらかの規制をかいくぐっての商売なのだろう。

この無言の立ちんぼ商いとは対照的に、市場の建物内の宗教儀式用品屋はブースが明確に固定されているので、建物内に店を出す権利のようなものがあるものと考えられる。また敷地内の駐車スペースと塀の外周の花売りたちは、午前中と夕方では人が入れ替わり、また印象としては、同じ村からのイブたちが数人ずつまとまっているようであった。おそらく村ごと、あるいはイブ個人による、ある種の場所の占有権のようなものがあるものと推測される。

建物内の宗教儀式用品店ではチャナンを作りながら売っているが、材料の花そのものは売っていない（ただし高級品のチャンパカとイランイランはバラ売りする）。場外の花売りは、大きな袋に詰めた完成品を運び込んで売り、材料の花はまったく扱っていない。

花売りのイブたちは、大きな袋に詰めた花を運び込んで売っている。人数としては、ざっと見渡して、50人を下ることはなく、たぶん70~80人はいらるだろう（ただし、アジサイ売りのトラックは1台1人と数えたが、じっさいには数人のグループである）。

もっとも多いのはハウセンカ売りで、赤と薄赤紫とピンクの三色をそろえている。マリゴールドとパンダナスの葉の細切れも、同じように大きな袋で運び込んで売られている。売るときにはビニールの袋に詰め、客との駆け引きで、かなり無理やり詰め込むことがある。アジサイは、敷地内の駐車スペースでも、また塀の外の花売りの一画でも、地面に山積みにして売っている。20センチほどの枝つきの花が何本かずつ束ねられていて、売るときに袋詰めにはしない。

チャンパカとイランイランは売り子のイブの人数も少なく、売られている

量もホウセンカやアジサイとくらべ圧倒的に少ない。お盆や洗面器のようなものに盛られ、客が一輪ずつ選んで買えるようになっていて、ホウセンカなどのように袋に詰めて売られることはない。確認はできなかったが、おそらく一輪いくらで売られていると思われる（一例では上質のチャンパカ20個が3万4000ルピアで買われた）。新鮮で芳香の強いものが好まれているようで、古くなって痛んだものは安売りされていた。チャンパカには白のほか、黄色と淡黄色の花が売られ、淡いオレンジ色のものもあった(後述の寺院の境内などで観察したものはほとんどが白花であった)。イランイランは淡緑色と淡黄色の二種類が売られていたが、寺院などで植えられているものを観察したところ、若い花は淡緑色で、花が老齢化するとともに花卉が淡黄色に変化することが判明した(また花卉が微妙に湾曲し、雌しべだけが見えて周囲の雄しべが隠れるようになる)。また売られているチャンパカとイランイランの花は、寺院などで観察したものと比較して、花がやや大ぶりで花卉の幅も厚さもあり、また色もやや鮮やかな印象を受けた(後述のように寺院などでしか見ることができなかったが、専門的に栽培している農家がある可能性は高いと考えるべきだろう)。

このほか、スイレンの花を売るイブが数人いる。洗面器のようなものに盛られ、頻繁に水をかけて新鮮さを保っている。芳香が強いためか、ハナバチ類が群がっている。客が一輪ずつ選んで買っていく。またチャナンには使わないが、他の儀式用の装飾品によく使われている花として、センニチコウ売りが比較的に数多くいる。数本ずつの束が積まれて売られている。

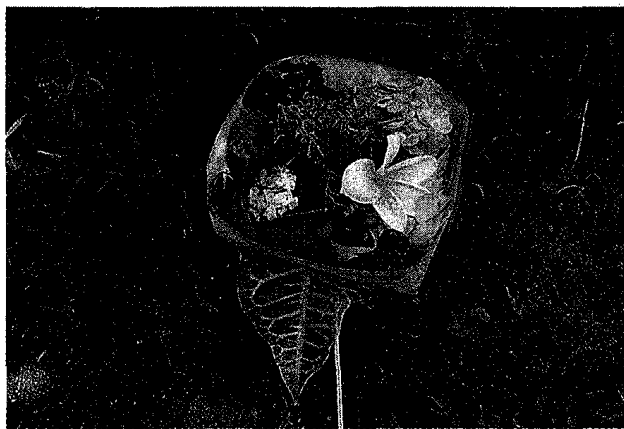
売り子のイブたちに村の名前を聞いてみたが、アジサイ売りは島の中央山地のブドゥグル村(Desa Bedugul)だけであったが、ホウセンカ、マリゴールド、パンダナスの葉の細切れ売りの村は、サンゲ村(Sangeh)近くのチバン(Cibang)、島の東部のトゥンクン(Tungkung)やパダンバイ(Padanbay)など、さまざまであった。



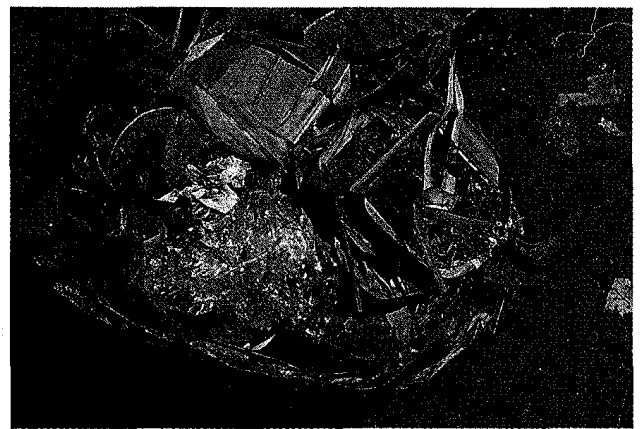
街角の寺院前にチャナンを供える(2006年12月23日、クタ)



もっとも典型的なチャナン。赤とピンクはハウセンカ、薄青はアジサイ、黄はマリゴールド、緑はパンダナスの細切(2006年12月23日、クタ)。



ハウセンカ(赤、ピンク、エンジ)、アジサイ、マリゴールドのチャナンに、庭木のプルメリアを加え、下にはクロトンの葉を敷いている。パンダナスに載っている褐色のものは香料だろう(2006年12月23日、クタ)。



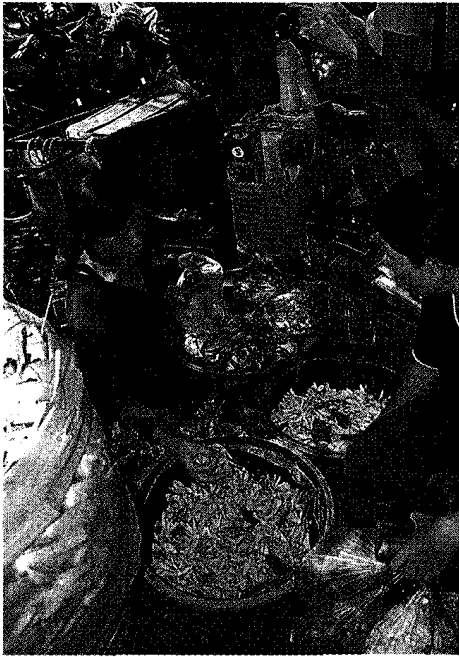
数日を経たチャナンはゴミ箱行きとなる(2005年12月25日、クタ)。



市場で売られていたチャナン。青いチョウマメの使用は例外的(2006年7月20日、デンパサール)。



市場の外周のハウセンカ売り(2006年7月13日、デンパサール)。



チェンパカ(オレンジ色と白)とイランイラン(緑で黄も混じる)の花が、市場の構内で売られていた(2006年7月20日、デンパサール)。



スイレンの花は香りが強く、切花にもハナバチが集まってくる。スイレンの下にセンニチコウが積まれている(2006年7月20日、デンパサール)。



センニチコウ。チャナンに盛られることはない(2006年7月13日、デンパサール)。



市場の外周にいたアジサイ売り(2006年7月13日、デンパサール)。



マリゴールドはハウセンカに次いで大量に売られている(2006年7月13日、デンパサール)。



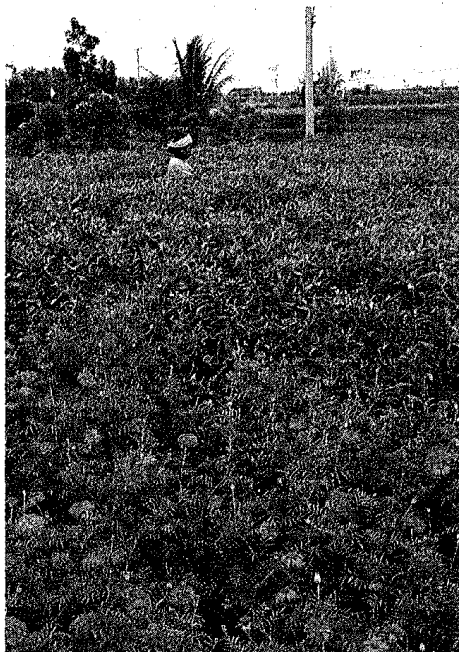
パンダナスの葉の細切。ほんのりと甘い香りがする(2006年7月13日、デンパサール)。



市場の外周のさらに道路側で立ったまま商いするチャナン材料売り（2006年7月13日、デンパサール）。



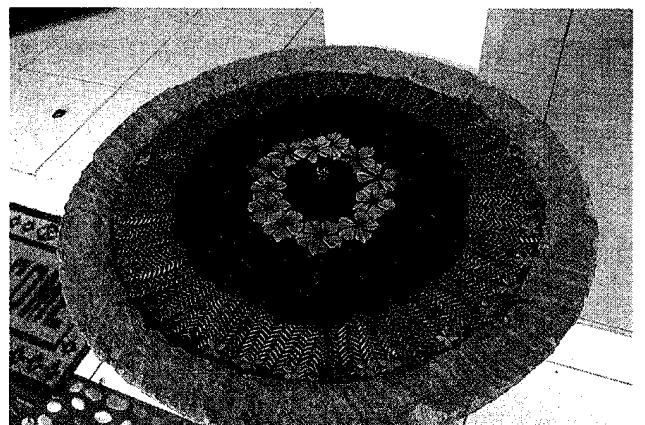
おばあさんが畑の畦でハウセンカを収穫していた（デンパサール郊外、2006年7月19日）。



大輪のマリゴールドの畑がハウセンカ畑の手前に広がっていた（デンパサール郊外、2006年7月15日）。



林のあいだにアジサイ畑が広がる（バリ島中央部のブドゥグル、2006年7月15日）。



伝統的な花首文化の現代的な応用（ウブドのリゾートホテル、2006年2月6日）。

調査結果の2——栽培地での観察と聞き取り調査

ホウセンカ:デンパサールから、わずか20分で最初のホウセンカ畑に出会う。水田のあいだに数区画があり、収穫中の区画、収穫後の(たぶん種子取り用の)区画、生育中で花をつけはじめたばかりの区画、種子を撒いたばかりの区画がある。

収穫していたおじさんの話:種子を蒔いて、二ヵ月後から収穫できる。生育中の区画は一ヶ月目。二ヵ月後から一ヶ月ぐらいのあいだ収穫でき、それから植物は枯れはじめる。三ヶ月強の寿命。最盛期には収穫は毎日できる。

種子は自家採取なのか購入か(疑問の根拠は、どの地方のチャナンでも、ホウセンカの品質がそろっているように見え、しかも花が大型で八重もあり、色も鮮やかなので、一定以上の品質のものが普及している印象がある)については、東バリのホウセンカ畑のひとつで、おじさんの話を聞くことができた。種子は自分の畑で自家採種とのことであった。ホウセンカはトウガラシ(小粒のチリ)の間に混植され、肥料が足りないせいか草丈は低い。父親がトウガラシを収穫、息子(12歳くらい)がホウセンカを収穫。東バリのホウセンカは採取後、4日間ももつ(西バリ産は2日しかもたない)。値段は1000ルピア/kg(お祭など需要があれば、キロ当たり1万五千~二万ルピアとなる)で、トウガラシ(1万7500ルピア/kg)より安い。

ホウセンカ畑は調査期間中、あちこちで見かけることができた。水田地帯のなかの灌漑が届かない場所、あるいは東バリのように乾燥気味の地方に多い。数枚の畑がまとまっている場所もあるが、他の作物との混植あるいは畑の縁にだけ植える場合も多い。

センニチコウ:上記のデンパサールから近いホウセンカ畑の一画がセンニチコウ畑となっていた。センニチコウは種子を蒔いて二ヵ月半で収穫できるようになり、それから四ヵ月ほどのあいだ収穫できる。したがって寿命は半年前後。収穫は一週間に一回。

センニチコウ畑は他にも見かけたが、ホウセンカ畑にくらべるとかなり少ない。季節的に花が目立たなかっただけの可能性も否定できないが、市

場での流通量を考慮すると、他の地域(たとえば東ジャワ)から持ち込まれている可能性を、現段階では排除できないだろう。

マリゴールド:マリゴールド畑も、市場での流通量にくらべ、畑の数が少なすぎる印象を受けた。市場で一度、小型トラック数台分が一気に持ち込まれたのを目撃しているのも、他地域から持ち込まれている可能性は高いだろう。東ジャワからであれば、数時間でデンパサールまで輸送できる。

ただし、観察したマリゴールド畑で栽培されていたものは、花が大輪で八重咲きだったので熱心に栽培している農家も存在することはまちがいない。マリゴールドが野菜畑の縁や畦などに植えられているのもよく見られるが、花が一重で小輪のものがほとんどであり、線虫除け用と思われる。ただし、そのようなマリゴールドを各家庭でチャナンに盛ることはなされていると推測される。

アジサイ:ブドゥグルからあがった峠から左(西)へ、ゴブレグ村へ向かう尾根筋道路(左手眼下にDanau Bryan, Danau Tamblinganを見下ろす)を進んでまもなく、アジサイ畑が広がっていた。その後もかなりの距離を進んでみたが、どこまで行っても同じ景色が続いていた。アジサイ畑は基本的に柑橘類と混植され、柑橘の樹の列のあいだにアジサイの列が並ぶ。ときどき、柑橘ではなくバナナのこともある。柑橘の種類は(名前は聞いていない)、生食用ではない。かなり酸っぱいので、ジュース用というより、むしろ絞って料理に使う種類だと思われる(ただしジュルック・ニピスと呼ばれる種類ではなく、実はずっと大きく温州ミカンぐらい)。

土地はかなり乾燥しているが、午後二時過ぎから雲が降りてきて霧がかかったことから考えて(標高は1400メートル前後だろう)、朝晩の霧で水分がかなり多量に供給されていると考えられる。樹高は日本の通常例からみて、かなり低い(膝上から股下ぐらい)。

収穫物を計量していた夫婦の話:計量結果は、大きく束ねたものが70キロ前後。卸値は一キロ当たり4000ルピア(お祭などで需要があると6000ルピア)。収穫は15日毎、つまり二週間に一回あるいは月に二回という意味だろう。

新しい作物だと思われるが、何年前から作付けされているのかの疑問については、ブドゥグルの峠からすぐの畑の若夫婦から、10年前からだと確認できた。それ以前は「野生」だったというが、では森や山にいまも生えているかと質問すると「ない」という答え。したがって、自生ではなく移入種と見なすべきだろう(日本のアジサイと、少なくとも見た目は同一種)。植え付けは挿し木で、枝を切って地面に挿し、うまくいけば6ヵ月で花をつけるという。

パンダナス:畑のあいだの一画などに植えられ、茂み状になっている。寺院(Pura Tama Nayun)の境内にも、イランイランの木の下に若いものが植えられていた。葉の縁にタコノキ(Pandan biasa)のような棘がなく、草丈も比較して低い。収穫されているものは、下のほうから順番に葉が切り取られているので、一目でわかる。収穫直後の切り口の匂いを嗅いでみたら、ごく薄い香りがした(見本を宿に帰ってから嗅ぐと、香りが強まっているような気がするので、乾燥させると香りが強まるのかもしれない)。市場で売られているパンダナスの葉の細切れを嗅いでみたが、やはり薄甘い香りがほのかにするだけであり、芳香はごく薄いといっていいたろう。

市場の建物内の野菜屋で料理用のパンダン・ハルムを見つけ、葉をちぎって嗅いでみると、うす甘いというより、やや薬くさい香りがした。したがって、チャナン用と料理用とでは、種類がやや異なると考えられる。香料野菜のパンダン・ハルムは、少なくとも売られているものでは、長さも60センチほどしかなく、ずっと柔らかい感じがする。

イランイラン:Desa Megwi(デンパサールから車で1時間)の村役場近くの大き目の人家の塀の外側と、その村の近くのPura Tama Nayunで見ることができた。垣根にしたり、境内に植え込んだりしている。垣根のものは背丈が1.5メートル前後で刈り込まれている。植え込まれたものも、背丈は2~2.5メートル。

花はたくさんついていた。最初は緑で、次第に黄色くなるものと思われる(市場では緑と黄色の二種類を売っているように見えたが、たぶん若くて芳香の強いものと、やや古く芳香の弱いものを分けていたのだろう)。黄色

の古い花は花卉が微妙に湾曲して、中央の雌しべだけが見えて周囲の雄しべは隠れるようになっている。

チャンパカ:Pura Tama Nayunの境内で二本(高さ8~10メートル)のチャンパカを観察した。Sangehの東の村々では、道路の並木(若い木が多く、樹高は4~5メートル)として驚くほどたくさん植えられている。また人家の門の横や、よく見えないが塀のなかの家族寺の横にも植えられている(樹高は8~10メートル)。花の季節はずれているらしく、花数は少ない(あるいは早朝に採取された後かもしれない)。花の季節は、案内の運転手(ルスナさん)によれば、9月だという。

花の色は白が多かったが、一部は淡黄色であった。ただし市場では黄色の濃いものやオレンジ色とっていいものもあり、また花卉が肉厚の立派なものが多かったので、チャナン用の品種が栽培されている可能性が高いだろう。

スイレン:Sangehの東の村々をまわったとき、道路わきの水田の二枚分でスイレンが栽培されていた。市場で売られていたのと同じと思われた。ただし車をとめての調査はしていず、写真も撮っていない。

考察：今後の課題

現場調査のつねとはいえ、調査を進めるにつれて新たな疑問点が生じ、また情報不足や言葉の不自由もあって現場にたどりつけていない問題が多々残されている。ここではいくつかの問題点を指摘し、今後の課題とするにとどめたい。

表1の備考欄を見ると、チャナンに使われる花には原産がインドから中国南部周辺の種類が目立つ。ホウセンカ、チャンパカ、イランイランであり、またチャナン以外の装飾品に多用されるセンニチコウもまたインド原産である。ヒンズー教文化がインドからバりに伝播したことを考えれば、また同じ熱帯であり気候が共通していることを考慮すれば、当然ともいえるだろう。

この三種のうちチャンパカとイランイランは花木であり、また中尾佐助

が「強香植物」と呼んだ植物である。チャナンによく使われているプルメリアも、原産は熱帯アメリカだが、やはり花木であり香りが強い。スイレンも香りが強く、インドにも多い（仏教文化では重要な花だと思われる）。ゲツカコウは切り花用でチャナンには使われず、また原産はメキシコだが、香りはきわめて強い。パンダナスの葉も、微香ではあるが、香りが重視されていることは間違いないだろう。さらに指摘すれば、チャナンには仕上げとして香油が振りかけられる。このことから、バリのヒンズー文化では香りの強い花が好まれていることを指摘することができる。

ただし中尾佐助が「強香植物」としてあげているうち、ハナショウガ類 (*Hedychium*) とジャスミン類 (*Jasminum*) は、チャナンに使われていない。またクチナシ類 (*Gardenia*) も、オーストロネシアの東端に位置するタヒチの国花とされている強香植物だが、チャナンに盛られることはない。これらの植物はバリでも植栽されているものが見られるので、チャナンに使われないことには何らかの理由があると思われる。

いま考えられる理由は、色の問題である。ハナショウガもジャスミンもクチナシも、花色は白である。チャナンに数としてもっとも多く使われるハウセンカの花色は、赤やピンクである。畑では一部で白花のハウセンカを見かけたが、市場で売られたりチャナンに使われたりすることはない。ハウセンカの次に使用量の多いマリゴールドの花は黄色である。熱帯アフリカ原産のヒゴロモコンロンカはチャナンによく盛られるが、近縁で東南アジア原産の白いコンロンカは、庭木などとしてよく栽培されているにもかかわらず、チャナンに使われることはない。チャンパカやプルメリアも、白っぽい花より黄色の濃い花が好まれている。したがって、赤系統と黄系統の色が好まれ、白はなんらかの理由から排除されているといえることができるだろう。

バリ・ヒンズーの寺院などの装飾品にも赤と黄色があふれていることから、バリ・ヒンズー文化では赤と黄色が特別の意味をもつものと考えられる（ただし、白と黒の縦縞模様の幕もよく見かける）。インドの供物の花輪では、赤と黄色の花も使われるが、白色のジャスミンがもっともよく使われて

いると思われる。したがって、同じヒンズー文化でもインドとバリでは違いがあることも指摘できる。

チャナンに盛られる花の原産地、香り、そして色の特徴は、バリ・ヒンズー文化の伝統の強さを印象づける。しかし表1を見ればあきらかなように、外来の植物もまた目立っている。熱帯アメリカ原産のマリゴールド、プルメリア、熱帯アフリカ原産のヒゴロモコンロンカである(アジサイについては、別に考察する)。マリゴールドはインドのヒンズー文化の供花でも大量に使われ、またプルメリアは中尾佐助の「強香植物」のひとつである。外来植物の多用は、保守性が強いと考えられる宗教文化ではあるが、バリ・ヒンズー文化に新しいものを導入する素地があることを示唆している。ただし、プルメリアの花は香りが強く、またマリゴールドの花は黄色、ヒゴロモコンロンカは花ではなく葉ではあるが色が赤系統で鮮やかであることを考えるなら、やはり伝統の保守性を指摘することができる。

この点で異例としかいいようがないのが、アジサイである。無香であり、しかも薄いとはいえ青という特別な色である。表2にあるよう、チョウマメの無香で濃い青色の花を盛ったチャナンがあったが、例外的なものであった。アジサイがほとんどのチャナンに盛られていることを考えれば、薄い青(水色)という色が好まれているという印象は否定できないだろう。

アジサイをヨーロッパに紹介したのは、1820年代に長崎の出島にオランダ商館の医師として滞在したシーボルトである(彼は学名の種小名を、妻のお滝にちなんでotakusaとした)。本国との往復はオランダ領であったジャワ島のバタヴィア(現在のジャカルタ)経由なので、インドネシアで早くから栽培されていたであろうことは想像に難くない。ジャカルタから車で一時間ほどのボゴール植物園の開設は1817年、中央山地の尾根筋にある分園のチボダス(Cibodas)植物園の開設は1862年である。

いずれにせよ温帯原産なので、熱帯での栽培に適しているとはいえない。シンガポールで一例だけ、花壇に植え込まれているのを見たことがあるが、日本で見慣れた眼にはいかにも貧相に見えた。手元にある熱帯園芸図鑑を見てみると、シンガポールの学者が書いた図鑑(Boo Chin Min et al., 2003)に

はアジサイが載っているが、ハワイの学者が書いた図鑑(Rauch, F. D. & P. R. Weissich, 2000)には載っていない。

アジサイが栽培されているのはブドゥグル地域だけであり、しかも新しい作物である。得られた証言では10年前からであり、おそらく15年ぐらいまでしか遡らないものと考えられる。アジサイ栽培の導入は農民個人の発想なのか、あるいは農協のような組織あるいは農業試験場などの指導があったのか？ 柑橘との混植には、専門家の発想が見え隠れする。すぐ近くにあるバリ植物園(Eka Karya Botanic Garden)は、その基礎が築かれたのが1959年と比較的新しい。

またブドゥグル周辺では換金作物の栽培がかなり古くから盛んだったようだ。高地野菜(キャベツ、ニンジン、ジャガイモ、ネギ、白菜、他の葉物野菜)だけでなく、Pasar Candikuningに何軒もの花屋さん(切花も少し置いているが、主に庭木の苗木と鑑賞植物の鉢物)があるように、園芸植物や花卉の栽培も盛んに行なわれている。高地野菜や花卉の栽培は、あるいはオランダ植民地時代に遡るのかもしれない。

アジサイはチャナン用にしか使われず、かなり特化した作物である。この地域で他にチャナン用の作物は栽培されていない(野菜畑の周辺にマリゴールドがときどき見られるが、栽培ではなく線虫除けだろう)。また、バリで得られたすべての情報は、アジサイはブドゥグルの特産であり他では栽培されていないとしている。

チャナンという供花はバリ・ヒンズーの習慣であり、宗教的な習慣は保守性がきわめて高いと考えられる。チャナンに盛る花は、ホウセンカやチャンパカをはじめ、インドからヒンズー文化とともに渡来したと考えられるものが多い。また前述のように、ホウセンカやマリゴールドは色(赤と黄色)で選ばれ、チャンパカとイランイラン、またプルメリアも芳香ゆえに選ばれていると考えるべきだろう。

だとすれば、青という異例な色で、しかも芳香がまったく欠如しているアジサイが、これほど急速に普及した理由は何なのか？ たしかに青といっても淡い水色であって、邪魔になる色ではない(濃い青だったら敬遠ないし

忌避されただろう)。花のもちが、他の花にくらべよいという印象はある。また「クンバン・セリブー」(「千の花」という意味)という名前のように、花数がきわめて多いという点は、生産者にとっても消費者にとっても好都合ではあるだろう。

アジサイのチャナン用花としての急速な普及の過程とその理由は、宗教的な伝統文化の保守性に照らして、きわめて興味深い問題だと思われる。

注

- 1 筆者は1980年代から90年代にかけて、ウォーレス『マレー諸島』(1869年)を主要な手がかりのひとつとして、彼の独自の進化論の成立過程を追跡するため、インドネシアの島々をたびたび巡り歩いた。そのときの国際線の発着地のほとんどがバリ島のデンパサール空港であったので、バリ島には土地勘があったし、またチャナンにも比較的慣れ親しんでいた。このことがこの調査テーマを選ばせた遠因となっているのかもしれない。
- 2 ウィルソン(狩野秀之訳)、1994年。『バイオフィリア』、平凡社(原著、1984年)。およびウィルソン(山下篤子訳)、2003年。『生命の未来』の第六章。角川書店(原著、2002年)。
- 3 バイオフィリア仮説にもとづく「花は資源の信号仮説」が、生態学者・環境心理学者のオリアンズらによって提出されているが、筆者にはほとんど説得力がないように思われる(Heerwagen, J. H. & G. H. Orians, 1993)。
- 4 中尾佐助(1999年)「オーストロネシアの花弁文化史」(中尾佐助・秋道智彌編『オーストロネシアの民族生物学——東南アジアから海の世界へ』平凡社、85～124ページ。その後、『中尾佐助著作集 第IV巻 景観と花文化』、2005年、北海道大学図書刊行会にも収録された)。
- 5 「花首」は特殊な業界用語だとは思いますが、他に適切な言葉が見つからないので使用することにする。「花弁」とくに一枚ずつの花弁を利用するのではなく、たいてい萼を含む花首として利用される。
- 6 近藤純夫(2004年)によれば、レイはもともとは超常的な力(「マナ」)を宿すサメ

の菌や貝殻、羽毛などを素材として作られたが、18世紀末ごろに花のレイが広く定着したという。

- 7 2006年9月にシンガポールの「リトル・インディア地区」での聞き取り調査による。また前後して行ったタイでの調査によれば、仏教寺院や伝統的な精霊信仰のお社に供される花輪も「プエン・マーライ (Pueng Malai)」と呼ばれる。ただし、花首のつなぎ方も出来上がりの形状も、インドのヒンズー文化のそれと根本的に異なる。またタイでは仏像とヒンズーの神像が並べて祀られていることも多く、さらに詳細な調査が必要だろう。なお、タイの歴史の第一人者である石井米雄氏のご教示によれば、Mala(花輪)、Malai(花輪にした)はサンスクリット語で、タイでの初出は『スコータイ第二碑文』(1345年前後)。
- 8 調査予算は、科学研究費萌芽研究「都市近郊の里山の保全と活用に関する総合的研究」(代表者:新妻昭夫、課題番号:16651015)による。この二回の調査では、熱帯地方の庭ではクロトンなど赤や黄色の色葉物が、温帯地方の庭における花の代替とされているのではという仮説にもとづく調査も平行して行なわれた。
- 9 バリ島の文化では小売は女性の仕事であり、市場の他の店や街角の小売店の売り子は女性である。インドでは小売は男性の仕事であり、女性が店先に立つことはない。同じヒンズー文化ではあるが、この点は根本的に異なっている。

参考文献

- ウィルソン(狩野秀之訳)、1994年。『バイオフィリア』、平凡社(原著、1984年)。
- ウィルソン(山下篤子訳)、2003年。『生命の未来』の第六章。角川書店(原著、2002年)。
- 近藤純夫、2004年。『ハワイアン・ガーデン——楽園ハワイの植物図鑑』、平凡社。
- 中尾佐助(1999年)「オーストロネシアの花弁文化史」。中尾佐助・秋道智彌編『オーストロネシアの民族生物学——東南アジアから海の世界へ』(平凡社):85~124ページ。(『中尾佐助著作集 第IV巻 景観と花文化』(2005年、北海道大学図書刊行会):675~719ページ)。
- Boo Chin Min et al., 2003. *1001 Garden Plants in Singapore*. National Parks' Publication.
- Chan, E. (text) and L. I. Tettoni (photo), 2003. *Handy Pocket Guide to the Tropical Plants*

- of Indonesia*. Periplus Editions (HK).
- Heerwagen, J. H. & G. H. Orians, 1993. Humans, Habitats, and Aesthetics. Pp. 138-172. in Kellert & Wilson, 1993.
- Kellert, S. R. and E. O. Wilson (eds.), 1993. *The Biophilia Hypothesis*. Island Press / Shearwater Books.
- Rauch, F. D. & P. R. Weissich, 2000. *Plants for Tropical Landscapes : A Gardener's Guide*. University of Hawaii Press.
- Warren, W. (text) and L. I. Tettoni (photo), 2004. *Handy Pocket Guide to the Tropical Flowers of Indonesia*. Periplus Editions (HK).